

大原野で奈良時代の建物群を発見

- 大原野松本遺跡 -

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



写真1 大原野松本遺跡で発見した掘立柱建物群 手前から建物2・建物1(北から)

京都市の西南に位置する大原野は、古代より「弟国」「隴国」、また大宝令の制定後は「乙訓」と呼ばれた地域に属します。この大原野では、1981年より農業土地改良事業が実施され、それにとまなう発掘調査を行なってきました。今回は、1996年3月から5月にかけて調査した奈良時代の建物群について紹介します。

建物群を検出した地点は大原野灰方町に位置します。ここは北西から南東に傾斜する丘陵が広がり、建物立地には最適の所です。また、付近には「泉殿」という小字名があることや、北と南に条里地割りが部分的に確認されること

から、遺跡の存在をうかがわせるものがありました。

調査の結果、掘立柱建物14棟と方形の縦板組井戸1基、溝、土壌などを検出しました。これらの遺構群は、大原野地域の調査では例のない大規模なものです。

建物群は柱穴の重複が少なく、建て替えの形跡はあまりありません。しかし、建物方位はいずれも西に振れ、図2に示したような3つのグループに分けることができました。

このうち、建物規模がもっとも大きい茶色で示したグループでは、建物1・2・4の東端の柱筋や建物2・3・5の南端の柱筋が

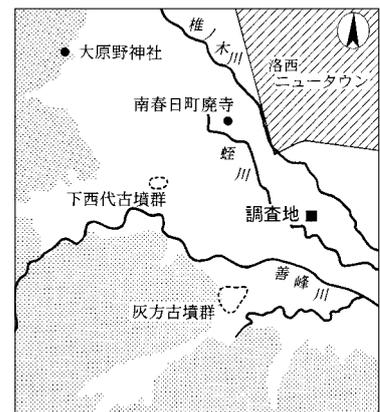


図1 調査地付近のようす

揃うことから、同時期に配置された建物群であることがわかります。建物4は東西に庇をもち、内部には浅い穴が6箇所あります。建物5は梁間3間で桁行9間の大きな南北建物に復元しましたが、柱間・柱筋が不揃いです。井戸は



写真2 建物4 内部の浅い穴は、甕を据え付けた跡か、あるいは床張り施設の跡とも考えられる（東から）



写真3 遺跡付近の航空写真（南東から）

建物1・2・5に囲まれた空間に掘られているため、このグループに属するものとみられます。

乙訓地域では、建物の方位が時期によって変化することが知られており、北で西に振れるものから次第に真北方向に揃うとされています。しかし、今回検出した建物群は、方位は異なるものの重複が少ないため、同時に配置されていた可能性もあります。

建物の年代については、周囲の土壌や包含層から奈良時代中頃の遺物が多数出土しており、建てられた時期が明らかとなりました。また、井戸からは平安時代前期の土器も出土しているため、比較的長く存続した可能性があります。

この遺跡は、規模の大きな建物が計画的に配置されており、一般の農耕集落と考えるより、むしろ郡衙ぐんがや駅家うまやといった官衙的な性格をもつ遺跡か、あるいは地方官人の邸宅などが考えられます。乙訓郡衙（乙訓郡の役所）については、すでに向日市内や長岡京市内で候補地となる遺跡が見つかったので、この遺跡がそれらとどう関連するかが今後の課題です。

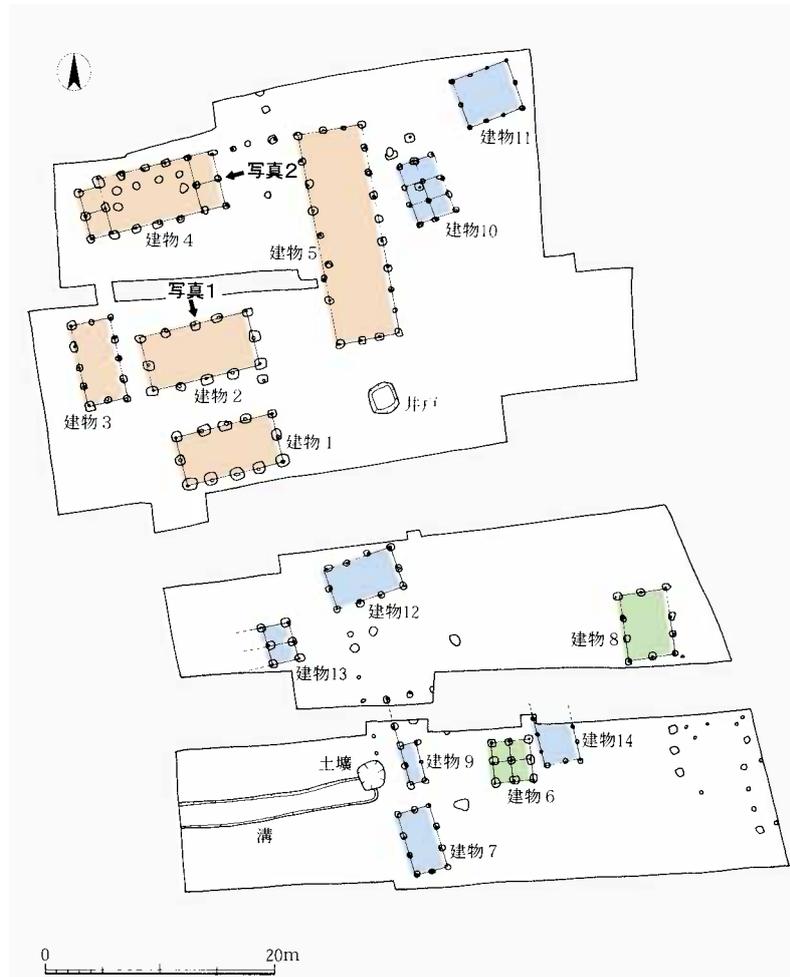


図2 遺構の平面図（建物の方位で色分けした）

次に、遺跡の性格を考える上で参考になるのが、奈良時代の山陰道の道筋が遺跡の東に想定されることです。この道は「古山陰道」と呼ばれ、小畑川西岸を西北に進んで老ノ坂から丹波国に通じる道筋が復元されています。また、遺

跡の北西 600 m には 1980 年に調査された南春日町みなみかすがちよう廃寺があり、ともに古山陰道を見おろす位置にあります。このように、奈良時代の大原野の様子は遺跡と古道の関係などから、徐々に鮮明になりつつあります。（永田 宗秀）